

CAGLIERO

カリエロ11 サレジオ会
宣教ニュース

N.131 - 2019年11月



サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



会

員の皆さん、友人の皆さん、

私たちは今、教皇フランシスコの『喜びに喜べ』と共に歩む2019年の宣教の旅路における、8番目、最後の「幸い」までやって来ました：

「義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」「日ごと福音の道を、それに苦しめられることになっても受け入れること、それが聖であるということです。」(『喜びに喜べ』94)

サレジオ会宣教師はそうのように生きています、多くの場合、英雄的なほどに。彼らは“風雪に耐えた顔”の宣教師たちです。迫害の時、預言者イザヤのように、そしてイエスのように、「顔を固い石のように」(イザヤ50・7)しました。しかし同時に、「温かい心」をもつ、子どものおだやかで喜びあふれる宣教師たちです。これは、例えば、イエメンで拉致されたインド人宣教師、サレジオ会員トム・ウズナリル神父の過酷な体験から、明らかに浮かび上がるあかいです。囚われの試練のただ中、トム神父は主のなぐさめと力を、力強く体験しました。しかし、この非凡な真理は、日常のサレジオ的、宣教的な表現を持っています：

日々の避けられない困難を、この最後の見事な「幸い」の、喜びあふれる心のまなざしでとらえることです。毎日、福音を受けとめること、たとえそのために、特に若者を教育する際に、困難が生じようと。これは、サレジオ会宣教師の特徴です。

J. Basanes 宣教顧問 ギジェルモ・バサニェス神父

サレジオ宣教の日プロジェクト

今

年のサレジオ宣教の日のために提案されるプロジェクトは、バラベク難民キャンプ、そのほかの同様のキャンプに、簡易な祈りの場を設営することです。その建物は「祈りの場」であるほか、共同体の会合、難民の人々が共に向上のために協力するグループや組織の会合の場、また、子どもたちが集まって遊んだり勉強したりする場にもなります。そのような簡易な建物は、5000から10,000ドルほどの費用で建設できると推計されています。

ベトナムのサレジオ会は、共同体や小教区を温かな宣教の精神で活気づけるため、このプロジェクトを活かすことにしました。神様がくださった人生のすべてに感謝し、自分たちより貧しい難民のために小さなさげものをするよう、サレジオ会員は人々にすすめました。小さな犠牲をささげ、レンガを一つかそれ以上、屋根用波型板などを買う分の献金をするよう、個人や家庭を招きました。ベトナム管区のすべての共同体、サレジオ会が司牧するすべての小教区が参加しました。総額6000ドルが集められ、2019年9月12日、ウガンダで、同地の管区の目上に手渡されました。

ベトナムは、世界各地で宣教師として生涯をささげるサレジオ会員の数の多さのため、高く注目されています(さまざまな国で、すでに100名以上のベトナム人宣教師が働いています)。そして今、ベトナム管区は、ウガンダのバラベク難民キャンプの「祈りの場」への大きな献金をもって、ほかの兄弟たちの先手を奪いました。

ほかの多くの管区がベトナムからインスピレーションを得て、難民キャンプのチャペルのために“レンガを売る”計画を立てていることに、私たちはとても勇気づけられます!



共に暮らし、働く喜び



私はスペインの産業都市、バラカルドに生まれました。私が13歳のとき、韓国で働くサレジオ会宣教師、ヘスス・モレロ神父が自らの活動について話すだけでなく、いくつかの小教区で、韓国でのサレジオ会事業のための資金集めのキャンペーンをしました。私はヘスス神父のほとんどのプレゼンテーションに同行しました。それは私にとって宣教の体験、一つの目覚めでした。

高校を卒業した私は修練院に進み、宣教地に派遣されることを願う最初の手紙を書きました。私が1978年に叙階されたころ、プロジェクト・アフリカが立ち上げられました。当時の私の管区長、サルヴァドレ・バスターリーカ神父が私たちを訪問し、驚いたことに私に言いました。「修練期のときに宣教地へ行きたいと希望していたね。今、君を信頼してベニンに行ってもらいたいと思うんだけど。」こうして私の宣教の歩みが再開しました。

私はドン・ヘスス・フェツレーロと共にベニンに向かい、1980年8月9日、到着した日に、私たちは同国にサレジオ会の拠点を開設しました。2016年8月20日、私はヨーロッパに向かう飛行機に乗りました。休憩が必要だったからです。36年に及ぶ宣教師としての歩みを、神と兄弟会員に感謝しています。そして研修を終えた後、私は2通目の宣教師志願の手紙を書きました。驚いたことに、総長は喜んでこれを受け入れ、私を祝福してくれました。今、私はブラジルのマト・グロッソに向かっています。ベニンでの最初の挑戦は明らかかなものでした。人々の言葉を学ばなければなりません。フランス語が公用語でしたが、街中で、また典礼ではそうではありませんでした。文化や伝統、人間関係、家族の関係を学び、気候に適応し、新たな病気に対処する必要がありました。ベニンでまことのサレジオ会員であるために、私たちは人々が求めることに応え、十代の若者や青年たちが直面する物的、文化的、霊的な貧しさの状況に対し、可能な答えを提案する必要がありました。

私たちは同伴を始めましたが、一貫したいくつかの要素があったと思います。私たちは耳を傾けました。そうすることで、修道者や行政担当者、村の人たち、カテキスタ、若者たち自身、特にアニメーターたち、皆の方向性や意見を受けとめることができました。個人が自分のプロジェクトとして行うものは一つもありませんでした。すべては共同体として行われました。これは、ベニンで私たちの拠点が築かれた最初のことから変わらない要素の一つでした。私たちは、同じ地域のほかの宣教師や地元の教区聖職者たちとの親しさや友情の雰囲気を保つように努めました。こういったことすべては、私たちがそれまで経験したものと大変異なる現実を理解するために、非常に重要なことだったので。人々の親しさ、特に子どもや若者との親しみあふれる関わりは、日々前進する助けになりました。

困難だったこと？ それは、ベニンの、また周りのあらゆる国々の政治情勢の展開がもたらすさまざまな影響でした。耐えることが困難なほど貧しさが深刻になった時期もありました。祝福だったこと？ それは疑いようもなく、神のために働く私たちと共に、神がいてくださったことです。何もなかったところから始めましたが、今やサレジオ会事業が同国によく根づいているのを見ることができます。私たちは白髪交じりの髪をとく年になりましたが、すでによく養成された何十人も若いサレジオ会員が、ドン・ボスコのカリスマに忠実に、それぞれの事業を自分たちのものとしながら、若者たちの間で素晴らしい働きをしているのを目にしています。

ベニンでの最良の時は、兄弟会員と共にサレジオ家族の中ですごした時です。最初の数年間、私たちは電気も、電話も、水道もありませんでした。実にアフリカらしい伝統を、私はいつも推奨しました……たき火を囲み、語り合う、耳を傾け、一緒に笑うことです……そして、若い会員たちとの忘れがたい思い出・喜びの時、分かち合い、共に計画を立てたこと、若者のために、若者と共に生きたこと。

共同体で兄弟たちと共に過ごす時間をもつのは大切なことです。兄弟を迎え、また迎え、さらに温かく迎えること、愛することです。私たちは一人ひとり、豊かさや限界をもっていますが、それを進んで分かち合おうとしなければなりません。共同体の感覚をもって、計画し、活動することです。私が何かを行うのは、共同体がそれを私に託したからです。また何よりも、神に、そして神の母、私たちの母に、私たち自身を、私たちが生きているもの、私たちがなりたいと望むすべてを、共にささげられることです。

スペイン出身、ブラジルへの宣教師 **フアン＝カルロス・イグンサ神父**



サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 **ピエールイジ・カメローニ神父**

福者**マグダレナ・モラーノ**(1847 - 1908)、FMA、今年11月5日は列福15周年。1881年にシチリアに派遣されたシスター・マグダレナは、貧しい階層の少女や若い女性のための実り豊かな教育事業を立ち上げました。絶えず「地上に、それから天に、まなざしを」向けながら、シチリア島各地に学校、オラトリオ、寮、作業所を開設しました。任命を受け管区長となると、数多くの新たな召命の養成のためにも責任を担いました。シスター・マグダレナは次のように振り返っています。「聖性は、数日で手に入るものではありません；ただ聖性を求めなさい、絶えず神に願い求めなさい、今すぐに聖性を追い求めはじめなさい……この世で、女性は地上の花婿を喜ばせようと懸命に努めます；私たち修道者、主の花嫁は、それよりはるかに主を愛するよう競わなければなりません、言葉ではなく、行いによって……イエスよ、私が聖人になったとき、わがいのちをお取りください。」

中東のサレジオ会のために



サレジオ会の宣教の意向

中東の新たな宣教の前線を、主が祝福してくださいように。

中東のサレジオ会の存在、働きは、多様で豊かです。中東管区は、ほかのサレジオ世界では見られない、文化的、宗教的、社会的、政治的に多様な挑戦のただ中で生きています。今日、サレジオ会中東管区は新たな宣教の前線を求めています。主がその歩みを照らし、福音宣教の使命のための人、手段、熱意を与えてくださいますように、祈りましょう。

